

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	途を行く（二）：創作
Author(s)	北野，裕一郎
Citation	龍南， 2 2 7： 1 0 1 - 1 2 1
Issue date	1934-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7191
Right	

途を行く

(二)

北野 裕一郎

(傀儡。安つばい曲められた英雄主義に、その云ふがまゝに繰られて行く影の様な傀儡。三文小説に現れて来る若者の様に、魂もなく、信念もなく、紙の上に踊る道化者に過ぎないのではあるまいか。それに又……。)

雪は翌朝になつても止まずに、降り続けた。部屋の中には陰鬱な空氣が漂ひ、底冷々のする冷さが、床の中に居ても感ぜられた。俊二は學校を休んだ。學校に行くとか何かが待つてゐる様に思へて、不安で仕方がなかつた。それに頭がづきん／＼痛み、咽喉がひからび、熱も幾分ある様だつた。昨夜の出來事は母にも告げずに、只頭が重いからと言つたまゝ床を出なかつた。一晚中まんじりともしなかつたのに、朝になつても神經の緊張は解けなかつた。

(それに又あの事が杉山みほ子と云ふ女性と關係のない事柄だつたらどうだらう。やはりあんな行動を取つただらうか。案外無關心を装ひ、安全第一と迴避したのではあるまいか。女に對して秘かに抱いてゐた愛が、俺を無意識の中に動かしてゐたのでないだらうか。不純な動機。不純な動機、それでも男か。何か辯解する餘地があるか。)

彼は頭の中に何か巨大なものが蔽ひかゝつて來るのを感じた。

(愛してゐることがいけないのか。差支へはない。それが眞實の動機であることを認めるのを厭がり、それを飾るた

めに他のものを持つて來て、獨り満足してゐた卑屈な心情こそ醜いものではあるまいか。

否。不純な動機でも良い。出した一步を有意義にするのが大事だ。そして戀愛よりもつと爲さねばならない事がある。はしないか。鬭争。鬭争。生きる可く争はねばならない。」

俊二は何時の間にかうつら／＼と眠りはじめた。外は時々強く吹きつける風が、ひようと唸り、その度に障子の破れがはた／＼と鳴つた。

どれ位俊二は眠つてゐたらう。ふと眼がさめると隣室の話聲にちつと耳を澄ました。細く壓へつけた様な聲が、時々漏れて來る丈けだつた。伯父の聲と低い母の聲。

「それが佐々木でも事を荒立てはしまいが。」

「いゝえ。あそこのことだからひよつとすると。」

「まさか、お前。縣會に出るときでも、こつちが生きてゐる時あんなに世話してやつたんだから。」

「さうあつて呉れ／＼ば……。おとなしい子供だと今まで思つてゐたのに。」

「いや。それがな。杉山とか云ふ女の先生が俊二を煽てたらしいんだ。何でもその生徒もその人の受持だとか。」

「ゐつ。杉山先生。昨夜俊二が出て行つてから訪ねて來た人がたしか杉山先生だつた様です。さう云へば……。」

「何か當りでもあるかな。」

「時々宅へ訪ねて來る事があります。」

「ほう。するとやつぱり何だ。その人だよ、俊二獨りであんな事のやれる筈がないから。」

「俊二を起して來ませうか。」

「いや。今起して何か言つて妙に曲らせると、反つて惡からう。まあ時を見て…………。」

「あんなおとなしい子が。」

「ぢや俺は今日は此で歸らう。」

「では佐々木の方は願ひします。」

「歸りに寄つて行かう。何心配する事はないよ。それよりもなあお靜。俊二はまさか…………。」

俊二は半身を蒲團からのり出して耳を向けたが、急に低くなつた伯父の聲は聞き取れなかつた。

「いゝ。そんなことがあつたら。」

「まさかと思ふが、そんな考へを持つてゐる學生が多いつて云ふからな。何大丈夫だよ。若い時だから、後になつたら判るだらう。俊二に時々遊びに來る様に云つてくれ。お前も心配が過ぎて休でも壞してはつまらんから用心するが良い。」

「御世話様でございました。」

「なに、又近いに寄らう。」

伯父は歸つて行つた。

何も彼も母親のお靜は伯父から聞いた。彼女は深い驚愕の中に投げ込まれた。彼女は今まで素直な朗かな子だと信じてゐたのだ。今急に俊二が彼女から千里も彼方に遠退いて行くのを感じた。驚きと悲しみの中に、夫に先たれた母親は

どうして良いか分別がつかず、只頭の上から大きな岩で壓へられた様な氣がして細いため息をつく、火鉢の前に坐つた。もし自分の子が危険な思想の持主であつたら。彼女は只泣きたくなつた。彼女は涙の中でも俊二をそんな人間とは思ひ度くなかつた。(あの女が)さう思ふと昨夜訪ねて來た杉山先生の優しく賢明さうな顔が急に恐しい惡魔か鬼の顔に變る様に思へた。俊二が悪いのではない、俊二が悪いのではない。妾はこの廣い世の中で此からどうして行つたら良いのだらう。夫が生きてゐてくれたら。

「お母さん。」

襖の向うで俊二の呟ぶ聲がした。お静ははつとして立ち上つたが、涙の跡を見せまいと思つて袂で眼のふちを拭くと俊二の寝てゐる部屋へ入つて行つた。

「何かい。氣分はどう。」

俊二は蒼白の顔をぢつと母親に向けた。

「顔色が悪いが、熱があるのではないかね。」

俊二はそれでも黙つて母親の顔を見つめてゐた。

「濟みません。御心配かけて濟みません。」

彼は熱した聲をふるはせて言つた。お静は狼狽してしまつた。

「何を云ふのかい。お前。」

「何をつて、今伯父さんが來たのでせう。お母さん。それでも私は後悔してゐません。いや。後悔なんかしません。」

「それではお前。」

「わゝ。みんな聞いてゐました。わけの判らぬ奴を制裁してやつた丈けだ。」

「お前は何を言ふの。」

「お母さん。私は正しいと信じてやつたのです。決して杉山先生に煽てられたものではありません。誤解しないで下さる。」

「ではお前。」

驚き悲しみの渦中にあつても母親は強くなければならない。彼女は涙に光る顔を上げた。

「獨りで正しいと思つてやつたのかい。それが正しいことか、他人の家で擲りつけたりして。家も昔とは違ふですよ。お前も世の中に出たのですから、少しは考へなければ。」

「いゝゐ。世の中に出ても正しいことはやります。皆世の中に出ると、只その日その日をまあどうにか暮せたら良いとだけしか考へないのだ。人間が意氣地がなくなるのだ。家が貧乏になつたからつて何です。」

「それではお前は主義者にでもなつたのですか。ゐ。」

彼女は今まで最も恐れて來た言葉を口にした。

「そんなことはありません……。」

「お前はやつぱり伯父さんの云ふ様に杉山先生に誘惑されてゐるのです。」
違ひます。杉山先生と關係はありません。杉山先生が迷惑しますよ。」

彼女は此以上何とも云へなかつた。子が高い處から彼女を見下してゐて、すがりつくにも手がとどかないのだ。それに子は母に對して手を延さうとはしない。母は今只どうすることも出來ずに泣き臥すのだつた。

「お前が主義者になつたら、私は、私はお父様に濟まない。お先祖様に濟まない。」

彼女は切れ切れに云つて終ふとどつと泣き始めた。俊二は暗然たる氣持の中に、ぢつと天井を見つめてゐた。母親の嘆きを犠牲にしても、彼は彼の意志の力を弱めてはならないと思つた。頭が急に又痛み出した。

一寸の間でも、外の寒冷な大氣に觸れて見たら、案外氣持が良くなりはいないかと思つて、俊二は便所に立つ風をして部屋を出た。今はもうお靜も何とも言葉をかけなかつた。

一月末の自然は地の奥深くで頑強な生の鬭争を持續してゐる様に見えた。西を走る連丘の雪は時々顔を出す陽の光のために、深い陰影を刻んでゐた。麥の芽が伸びた畑には殘雪が班になつてゐる。何もかもが戰いてゐる。不安、恐怖、すべての感情が自然に溶け込んで、強い息吹きを見せてゐるではないか。柿の木の黒い鳥にも味方になつて呉れと人が叫びさうな今の自然。

「先生、先生。」

俊二は深いあの状態——それは何事かを思索してゐた様でもあり、又何も考へてゐない虚無の状態だとも云へば云へるものだつた——から、急に引き戻された。見ると、田の中の細い徑を小供が一人走つて來るのだ。小供は彼の前に立止まつた。

それは彼の擔任の小供だった。

「今日は學校を休んだのか。」

小供は白い息をはつはつ出しながら答へた。

「先生が休んだもんで、杉山先生が一時間して歸らして呉れました。」

俊二は學校に出て行けば良かった、杉山先生も心細く感じたであらうし、伯父や母の話がら察すると他の職員達も知つてゐるに違ない、さうすれば學校に行かなかつた事は卑怯な行爲と取られはしまいかと思つた。

「先生。うちはな。町さ移るんで。」

俊二は小供が嬉しさうに、彼を見上げながら云ふのに始めて氣付いた様に見えた。

「何うしてか。」

「あんな。兄やも姉も一昨日歸つて來てな、お父さんと話して皆町さ移ることにしたんや。」

「そいでな、三月學校がすんでから移るんや。」

小供はそつと付け加へた。

「今のこと兄やが誰にも言はんどけと言ふたけどな。」

「先生だから良いけど、他の人に言はん方が良いよ。」

「うん。田舎じや米を作つても食ふて行けんち父たんがいつも云ひおつたけど、町に行つたら良いてな。」

又故郷を後にして、否貧困に故郷を追はれて、去つて行く人々だ。此の地の上の何處に生活しても、人間から苦しみが

除かれる所はなからうが、人間は夢を追つて果なく迷つて行くのだ。今に町に行つても、又第二の町へと追はれるだらう、馬鹿な、俊二は嘲りたくなつた。

「辰、たーつ。」

「おーい、何かよう。」

遠くからの呼ぶ聲に、良から取つて來た小鳥をいぢつてゐた辰三は應へた。聲の主がだん／＼二人に近づいて來ると、辰三は又呼んだ。

「姉やかよ。」

「飯ぞ。」

陰惨な暗さが次第に濃くなつて行く中に、近づいて來る辰三の姉の白い顔がぼうつと浮んだ。

「まあ、坊ちやまでしたか。」

辰三の姉のお末は、俊二の幼な友達であつたが、高等小學校を出ると、町の製絲會社に行つてゐた。不健康な工場の空氣の中で生活してゐる彼女の顔は蒼いまでに白かつた。又彼女は昔から坊ちやんと呼びなれて來た俊二を、今急に先生とか他の言葉で呼ぶことが出来なかつた。俊二はお末が大きくなつたのに驚きながら聞いた。

「町の方へ引き越すさうですね。」

お末はまだ家の者丈けに秘めてゐたことを俊二が知つてゐるのに驚きながら、あやふやな態度で答へた。

「え、まだ決めて了つてはゐません。それでも鐵工所に出てをる兄も、田舎よりは町が暮らし良いと言ひますので。」

「さうですか。」

二人はお互に幼い時に比べて、その言葉の餘りに眞面目なのを不思議に感じながらも、口から出る時は、その言葉は固い殻に包まれて出て来るのだつた。

「坊ちやまも學校を止めなさつて……。」

「貧乏じや學校どころじやないからな。」

答へるともなく、それかと言つて獨白の様にもなく、俊二はゆつくり言つた。

「本當に。」

お末も黒い土を見つめながら言つた。二人は黙つて立つてゐた。辰三は小鳥の足を持つてぶらさげたり、羽根をむしつたりしてゐた。何時の間にか町の工場に行つてゐた幼な友達のお末が姿も言葉付きも立派に洗練されてゐるのさへ、俊二は何物かに突き離された様な氣がした。

田園の冬の夕暮ほど、陰氣なと云ふ言葉がふさはしい時はない。どんよりとした天候の中を、時々強く吹き付ける風が何もかもを呪ひつくし、人は寒氣に家の中にちこまり、しのび寄る闇の中を、薄い炊事の煙が弱々しく見ゆる。早く春が来れば何もかも解決出来るのだ、そんな考へが理由もなく人の心に入つて来るのも、冬の半ば過ぎた一月末頃の夕暮である。

「工場は如何です。」

「今は組合の支部がありますから、前よりずつと時間も短く樂になりました。」

「組合の支部——。」

「さ、」

月刊雑誌に發表されるプロ派の作品の中で、俊二も「組合」とか「××支部」とかの文字には何度も出合ひ、その度にそれ等の言葉から何か自分等の世界から遠い英雄的な色彩に充たされたものを頭の中に浮べてゐたが、今その遠い世界の言葉をすら／＼と何等の不思議もなく、自分の幼な友達の女工が、しかも無限の愛着と信頼とを以て口に出すのを聞いては驚くと同時に、この女がひどく尊敬されるのだつた。

水吞百姓の娘が今では集團生活の眞中で雄々しくも生活の波を泳いでゐるのだ、一人では弱い。十人の弱い者は強くなる。女でも。この蒼白い顔をした女は全身でそれを俊二に物語つてゐるのではないか。

「以前は十時間以下の労働なんか夢にも考へられませんでした。いつもしめつばい家屋内で働くものですから、病人が絶えませんでしたが、組合の支部が出来てからは、會社も組合が怖しいのか、ずつと樂になりました。」
急にお末が雄辯になる様にした。

「組合がこの村にも出来ると良いけど、でもつまりません。景氣が戻つて來たと言つても百姓には關係のないことださうですから。」そんな知識を彼女に與へたのも組合であらう。

今まで黙つてゐた辰三が急に言つた。

「先生。町に行くに、汽車に乗るんじゃない。汽車に。」

俊二は苦笑しながら答へた。

「あゝ、汽車に乗るよ、君は汽車に何度乗ったことがある。」

「うん。俺あ三べんある。五郎はまだ一べんもないつて言ひをつた。」

辰三は汽車に乗るを楽しく夢る様な顔付きをしてゐたが、思出した様に姉をうながした。

「姉や。飯食ひに歸らう。」

姉弟は挨拶をして歸り始めたが辰三は急に後を向いて言つた。

「先生。あしたは學校にござるか。」

「きつと出るよ。」

もうすつかり暮れて終つた。母はどんなに心配してゐるであらう、俊二はさう思ひながらこのまゝじつとしてゐたい様な氣がした。

不安な日が毎日繰返されて行つた。

俊二は、自分の身の上に何かと起つて來てゐるのにもかゝらず、その姿にまだぼんやりして氣が付かないでゐるのではないかと思つた。

職員室の隅の机に着いてゐる彼に向つて、人々は何か言ひたさうにしながら、おづ／＼と目と目を合せてゐるばかりだつた。俊二と話をしたり等すると、身の破滅を招きはしなかと恐れてゐる様だつた。校長も彼には黙つてゐた。

不安な日が毎日繰返されて、時は冬から春へと移つて行く。残つてゐる寂寥な冬の空氣の重壓の下に、垣根には雜草

がそつと芽生ぬ、又灰色から淡くなつて行く雲の時々の割目からは、太陽が柔らかい光と熱を投げて、枯れた桑畑の黒土を愛しはじめる。麥が五寸六寸に伸びて行く。都會に住む人々が胸に浮べる田園は、夢として丈け實現されるだらう。この素朴な自然。この靜寂な農村、誰がこの中に包まれて生活する人々の苦しみを知ることが出来る。辰三の家は先祖からの土地を後にしようとしてゐた。後にするのではない。土地から追はれて行くのだ。眼に見ることの出来ない又眞正面から叩きかゝつて行くことの出来ない食困に追はれて行くのだ。村は疲れ果てゐる。

辰三の姉のお末は今しみじみと考へて見た。彼女の一家が生活に迫られて、街の方へ移るのはさして彼女に驚きや悲しみを與へはしなかつた。併し彼女が幼い頃から見なれてゐた、丘の小高い中腹にあつた白壁の家に育つた、幼な友達の俊二が學校も中途で止めて代用教員をして暮してゐるとは、世の中の苦しみを知らずに、夢を追つて來た俊二が、急に生活の渦の中にまきこまれてゐるのだ。

あの富裕な家でさへあんなになつたのだ。彼女の一家が村で暮して行けなくなるのもと、彼女は諦めに似た心を抱いても見た。が女工として一勞働者として鍛へ上げられて來た彼女等には諦めることは許されてゐない。組合は教へてゐる。前進だ。前進だ。未來へと。

彼女は町へ移つて行つたら、新しくやり直すのだと決心した。

それにしても俊二はこのまゝ此の村で暮して行くのであらうか。一生を田舎の小學校の教員として、彼女は同情の眼でどうする氣であらうかと思つた。

彼女の一家は今兄の鐵太が歸つて來るのを待つてゐる丈けだつた。K市の鐵工所にもう七年程も職工として働いて

ある鐵太は、家中が市の方へ引き越したら、暮しの費用も少くなるだらうと思つて、片付けるために妹のお末を先に歸したのだつた。鐵太の様な勞働者は、未來に通ずる途は、只現在の現實があるのみだと信じてゐたから、如何なるものにも屈伏せずに、ひたすら前へ進んで行くのだつた。

老いぼれて、田の黒い土の中に朽ち果てようとしてゐる父母、田舎で何も知らずぼんやり貧しさの中に育つて來た、末子の辰三。都會の工場の埃に洗禮された兄妹の鐵太とお末。

すべてを包んで大地は春へと廻轉して行く、雲雀が、もう直きに春の中へ巢を作り、淺黄色に晴れた空に啼くだらう。

俊二は其後みほ子とは會つて話すことを避けてゐた。職員達の空氣がそれを促したのと、何か怖いものが待つてゐやしないかと不安に思へたからでもあつた。みほ子の方でも、大して變つてもゐず、平氣を裝つてゐて、彼と會つても眼で會釋するだけに止めた。

その状態のまゝ三月に入つた。もう日暮が晚くなつて、柔かい夕靄が途から、その兩側の雜木の中にすつかり忍んでゐて、暖かみを増した風が無頓着な人にも、もう春だと悟らせる。

俊二は學校歸りの途を急いでゐたが、ふと、前方にぼんやり浮んでゐる人影を見つけると、聲をかけた。

「杉山先生びやありませんか。」

やはり其はみほ子だつた。が彼女は黙つて俊二が近づくのを待つてゐた。俊二は何か落しものでもして探してゐるのか

と、思つて近よると、みほ子は始めてこちらを向いた。

「どうしたんです。何か落しものでも。」

「いゝね。先生のお歸りを待つてゐました。」二人は久しぶりで肩を並べて歸り始めた。みほ子は何か言ふことがあるのを強ひてかくしてゐる様に何でもない事を言ひ出した。

「もう随分麥も伸びましたわ、何寸位ありますやう。」

俊二はこんな平凡なことから始めて行くみほ子の會話の後に、何時も重大な問題が、顔を出すのを思ひ出すと、ぼんやりしてはいけなさと、注意深く緊張して答へた。

「もうほとんど一尺ですよ。」

「麥は小作人のものになるんですつてね。」

「でも大したことはないでせう。麥なんですから。」

會話が少しの間切れて、二人は足を鈍く運んだ。俊二はみほ子が早く本題を切り出して呉れば良いと思つた。いつもの様に壓迫して来る相手の頭の中のからくりが、彼をいつも受身な立場におしやるのであつた。

「春ですわね。」

女は夕暮の空氣を胸一杯に吸ひ取ると、ゆつくり言つた。俊二は答へずに（落着け、落着け）と胸の中で自分にさゝやいてゐた。

「春の悲哀はどんな種類のものでも、贅澤な悲哀だつて。」

俊二は女の言ふことが良く判らなかつたので訊き返した。

「何ですつて。」

「何と言ふ詩人だつたか忘れたけれど言つてゐますの。春の悲哀は、それがどんな種類のものであれ贅澤な悲哀だつた。」

「……………」

「どんな意味でせう。」

「さあ。春は何も彼も忘れて、華やかに暮せとでも言ふのでせうか。」

「先生も高等學校の時代は、春の悲哀は贅澤な悲哀だつたのでせう。」

「さあ、春になると詩人が多くなつたやうです。皆で良く歌つた。」

「贅澤な悲哀だと言つた詩人は、食へることに困りはしなかつたでせうね。」

「どうしてです。」

「だつて百姓の人にそんなこと言つて御覧なさい。」

俊二は何とも答へなかつた。

春の悲哀。學生時代は彼は友達と良く山や野に行つた。皆が輝かしい夢を見ながら、心の底から若い歌を高唱しながら、丘の上に横になつた。楽しい夢だつたにちがいない。しかし淡い雲の様な夢だつた。皆が東京の空をあこがれてゐた。其處に行つたら若い新進作家になれると思つてゐた。彼等は文壇について種々なことを話し會つた。

俊二の現在にとつては、其は完全に過去に屬することであつた。そんな生活に對して今でも時々出て來る愛着やなつかしさはどうすることも出来なかつた。

「先生、私は學校を止めようと思ひますの。」

長い沈黙の後にみほ子が急にさう言つた。

「どうしてです。」

俊二は不意に言はれたので、すつかり慌ててしまつて訊ねた。

「止めてどうするつもりですか。」

「東京の伯母の家へ行かうかと思ひますの。もう此處にゐても仕方がありませんから。」

「校長が何か貴女に言つたのですか。」

「いゝゝ。私獨で決めたの。」

校長から何か言はれたに違ひない。校長は縣會議員の佐々木、俊二が家へ行つてみほ子の生徒の稻本はつのことできりつけたことのある佐々木に何か言はれたに違ひない、みほ子を悪く言つてゐた伯父。

情實と言ふ覆の下で此の田舎の小學校の職員達は、怖れおのゝきながら職業を失ふまいと忖屈に、すがりついてゐるのだ。

「三月きりで止めて東京へ行きます。先生はもつと田舎で暮して見た方が良さうですわ。」

何氣なく彼女はさう言つた。彼は母さへ無ければと思つたが、東京に行つたとしても、今の彼が何の職業につけるのか

學校は中途で退いて、勞働者のやうな剛い体もなく、

「東京へ行つて何をするんです。」

「まだ決めてはゐませんが。手紙を差上げられる中は、差し上げますわ。」

「どうして。」

「伯母の家でも、私獨り樂に食べさせる程の餘裕はありませんから、どうせどうにかせねばならないのですけど。」

俊二は手の中から全てのものを、奪はれたやうな氣がした。

暮れなやんでゐた春の日は、今はもうすつかり夜だつた。夜氣を含んだ風がゆるく彼等の間を流れて行つた。

翌日の職員會議で、正式に杉山みほ子の辭めることが發表された。心なしか皆が意地悪い視線を向けるのを俊二は感じて、大きな聲で叫びたいやうな氣になつた。

「何時東京へ發つのです。」

職員會議の濟んだ日の歸途、俊二はみほ子に訊ねた。

「二十三日の午後三時の汽車で、でも何だか先生に送つていただき度くないんです。理由はないのですけど。」

「……………」

「お怒りになつて。先生に驛まで送つていただくと私……………」

彼女は後の言葉を濁した。(女は弱い……………)と何時か彼女が言つたのを俊二は思ひ出した。一步前で。意心から情熱への一步前で。二人は同時に心の中でさう叫んだ。俊二に田舎教師の興味を教へてくれたみほ子、農夫の生活に鋭い觀察

をして、彼に貧困の生活を教へた彼女。あの夜佐々木の家からの歸り途で（弱い者には何も無いのか）と確信に充ちて反問した女。なま／＼しい現實の眞中で俊二は、黒い布で眼を覆はれたやうに感じた。

二十三日が來た。

彼岸の中目、日の丸の旗が軒毎にはた／＼となつてゐた。晴れた空に雲雀が啼いてゐた。鵜の群が北の空へ消れて行つた。途傍には、すみれが可憐な花を開いてゐた。一面に多から全く生き返つた土の香が漂つてゐた。

俊二は朝から連絡のない色々なことを思ひ、獨で落着けずにゐた。今日はみほ子が村を去るのだ。彼は驛まで送らうかとも思つたが、みほ子に言はれてゐるのでそれも實行出来なかつた。戀か。いやそんな物ではない。彼はこれを朝から何度繰返したであらう。去る者は日日にうとし。そんなことを漠然と考へると、氣がいらいらしてならなかつた。

「先生」

「先生」

外から聲がするので立つて障子を開けて見ると、辰三が立つてゐた。

「先生。餅を持つて來た。」

彼岸の餅の入つた重箱を置くと辰三はにこにこしながら。

「今日兄さんが歸つて來る。いよいよ汽車に乗つて行くんや。」

「さうか。」

「姉やが驛まで兄やんを迎へに行つたぞ。俺も、山の上まで行つて見よう。」

「さうか。一寸お待ち、先生も外に出るから。」

辰三と彼は田の中の徑を話しながら行つた。

「町に行つたら電車があるにな。先生。」

「あるよ。」

「俺あ電車に乗るんだ。電車と汽車とどつちが早いかなあ。先生。」

「おい。辰三。あの旗まで競走しよう。」

彼は小高い山の頂きに、小供達が兵隊遊びにでも立てたのであらう、春風にひるがへつてゐる赤い旗を指して言つた。

「一二の三。」

二人は走り出した。何時もなら速さを加減して走る俊二も無茶苦茶に走つた。走りながら彼は胸がつまつて、涙がこみ上げて來さうになつた。一息に頂上までかけ上ると春の晴れた空は暖い光に充ちてゐた。下を見ると辰三の走つて來る小さい姿が木のない中腹に見えた。

「先生。速いのう。」

やつと走りついた辰三は顔を曲めてはつはつと息をしながら言つた。

「先生。汽車だ。汽車だ。」

辰三は双手を上げて叫んだ。俊二も立ち上つた。隣の町の停車場を出た上り列車は、平坦な田の中を黒く這つて行く。

三時の上り列車。みほ子が上京する汽車。俊二は思はず左様ならと叫んだ。一年に足らない日數であつたがあんなに親しくしてくれたみほ子。意志の強い女。涙が頬をつたはる。此が戀か。此が戀か。ごまかすことを止めろ。此の涙が戀か。

「先生。俺が町に移る時も、あの汽車だのう。あの汽車に乗るんだ。」

俊二は辰三の言葉が耳には入らなかつた。みほ子。健在であれ。大都會の渦中でも、その冷靜な意志を失ふな。東京。東京。俺だつて何時かは。俊二の胸の中には壓へ切れない強い力と熱が燃えてゐた。それにしても此が戀なのか。涙は止めどもなく流れてゐる。

強く生きよ。彼は一生涯田舎教師で終るものと、足に強く力を入れて思つた。(運命なんて氣紛れな天氣以上ですから、どちらにでも向くものですわ。)みほ子の言葉が思ひ出される。強くなれ。強くなれ。生活は鬭争だ。

さう熱い心で叫んだ後は、俊二は空虚な心を抱いて茫然と汽車を見送つた。列車はその後半部を見せて、森の中へ入つて行かうとしてゐる。

「汽車は速いぞ。万歳。万歳。」

辰三は見えなくなつて行く汽車に向つて叫んだ。俊二は黙つて空と連丘との境を見つめたまゝ立つてゐた。今何を考へよう。彼の心は形容の出来ない内容物で一杯だつた。

「兄さんが歸つて來た。先生。あすこに。」

辰三は指してそう言ふと、山を走つて下りはじめた。見ると土手の細い途を、包みを肩にした鐵太と迎へに行つたお末

が村へと急いでゐた。

「兄ちゃん。」

下で辰三の聲がした。雲雀が啼いて消えて行つた空は、柔らかく晴れてゐる。(未完)

(九・二・一五)